２０２３年度

明星大学人文学部

国際コミュニケーション学科

卒業論文

# 日本人留学生はなぜ女性の方が多いのか

内藤　美幸（20H1-073）

２０２３年１２月５日

目次

１．序論　本研究について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
1.1　研究の背景　留学時の経験・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
1.2　先行研究のレビュー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
1.3　研究テーマ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
1.4　研究方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

２．本論　日本人大学生に着目した留学の現状と意思・・・・・・・・・・・・・・7
2.1　調査の対象と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
2.2　インタビュー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
１）対象者１へのインタビュー結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
２）対象者２へのインタビュー結果・・・・・・・・・・・・・・・・・１０
３）対象者３へのインタビュー結果・・・・・・・・・・・・・・・・・１１
2.3　インタビュー結果からみる傾向・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
１）インタビュー1 の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
２）インタビュー2 の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
３）インタビュー3 の分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
2.4　インタビュー結果と２つの関連・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
１）歴史的に見た日本人留学生・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
２）ジェンダー・ギャップ指数・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１５

３．結論　日本人と海外留学の今後・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
3.1　本論分の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
3.2　日本人大学生の留学のイメージと現実・・・・・・・・・・・・・・・・１６
3.3　課題と展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７
3.4　研究を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１７

参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１８

## １．序論　本研究について

### 1.1　研究の背景　留学時の経験

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が毎年公表している日本人学生留学状況調査によると、地域別・男女別日本人留学生数のデータが公表されている２００４年から２０２２年のすべての年において日本人は男性よりも女性の方が留学する割合が高いことが明らかになっている。私自身、２０２２年の８月から１２月の約４か月間、オーストラリアのブリスベンに留学をした。私が通っていたクイーンズランド工科大学の留学生向けコースである General English の１クラスでは、在籍している日本人９名のうち６名が女性であった。在籍中は複数回クラス替えがあったが、毎回女性の割合の方が高く、男性の方が多いということが一度もなかったことが印象的であった。また、明星大学人文学部国際コミュニケーション学科が開講している留学１という授業では履修生の８割が女性である。さらに、２０２２年度の体験系科目の授業では中国フィールドワークの履修生は６割、タイフィールドワークは５割、サマースクールは７割以上の履修生が女性である。２０２３年度のガーナフィールドワークにいたっては、履修者全員が女性である。これらから、なぜ留学する日本人の割合や海外志向はなぜ女性の方が高いのかを明らかにしたいと思ったことが本研究をしようと思った背景である。

### 1.2　先行研究のレビュー

これまでに「国際志向性」、「留学とキャリア」に関する先行研究はあるものの、「日本人留学生における女性の割合の高さ」を研究している文献はない。黒宮亜希子、橋本由紀子、金沢真弓の「海外留学に臨む大学生の実態と課題について―学生を対象とした調査を基に―」では、大学生が留学に対して友人や新しい人とのつながりを作ることを期待していることや、不安要因として人生で初めて海外に行くことにより１人になる不安が大きいということが明らかになった。そして、初めて海外渡航する学生から頻繁に海外へ渡航経験がある学生と、海外渡航や海外生活への学生自身の親和性には大きなバラつきがあったと述べられている（黒宮、橋本、金沢　2016）。

さらに、小島奈々恵、内野悌司、磯部典子、高田純、二本松美里、岡本百合、三宅典恵、神人蘭、矢式寿子、吉原正治の「日本人大学生の海外留学に関する意識調査－「内

向き志向」と留学意思の関係－では、学生の「内向き志向」と留学意思の関係について検討されており、「内向き」な学生には留学意思がないことが示唆されている。また、「外向き」な学生に比べて「内向き」な学生は、海外での生活などの留学における問題をより問題視していることが明らかになった。しかし、「内向き」であるために、海外留学をしない若者が増加しているとは言い難いと述べられている。さらに、留学を阻害する要因として、費用、語学力不足、海外での生活に対する不安、情報不足などがあることが確認されたと述べられている(小島、内野、磯部、高田、二本松、岡本、三宅、神人、矢式、吉原　2014)。

また、遠藤和馬の「戦後日本における海外留学の変容と若者のライフコースに関する考察」では、日本人の海外留学が多様化、短期化していることが明らかになっている。また、同様に「内向き化」も指摘しており、留学の変容の要因として少子化や就職活動の早期化と長期化、大学全入時代への突入などが挙げられると述べられている(遠藤 2018)。

さらに、太田浩の「日本人学生の内向き志向に関する一考察－既存のデータによる国際志向性再考－」では、内向き志向の要因の１つとして「短期的なキャリア形成志向」が挙げられている。日本で学ぶ外国人留学生を含め海外の学生は、さまざまな経験を積んで３０代前半を目途にキャリアを確立するという長期的なプランをたてるのが普通であり、こうした大学卒業時の就職に全力を注ぐ傾向が非常に強い日本の学生との違いも内向き化要因として挙げられると述べられている(太田　2014)。

しかし、「内向き化」は古い考えであると主張するものも存在する。大川章一の「内向き志向の日本人は古い考えだ」(東洋経済オンライン)では、海外の名門大学への正規留学や MBA 留学という定義で考えますと、以前に比べて減少傾向にあるのも事実であるが、ここ最近のトレンドとしては、中学・高校留学も全体数の約２割を占めていて、２０２０年の大学入試改革や英語教育の見直しの動きの中で留学の若年化も進んでいることがあげられと述べられている大川　2018)。

また、太田浩の「なぜ海外留学離れは起こっているのか」では、大学在学中の交換留学や海外研修、学位取得を目指す海外留学、そしてこれら２つに共通な事項の計３つに分けて考察されている。この考察からは、就職活動の早期化と長期化や学士絵の海外経験を評価しない雇用者、英語圏大学の学費高騰、テロや感染症などのリスク回避、日本の便利さと居心地の良さなど複数の要因が明らかになっている(太田　2011)。

さらに、河合淳子、韓立友、孔寒冰の「大学生の留学志向と社会的背景　日中比較を手がかりとして」では、日本の京都大学と中国の浙江大学の学生を対象に調査が行われており、京大生は「留学したいと思ったことがあるが、留学に向けた準備をしていない」という浮動層が過半数を占めることや、浙江大生は京大生より、研究活動や就職に留学経験が役立つと考えるものが多いことなどから、京大の場合、８割以上の学生が留学のメリットを感じていながら、その過半数の学生は留学に向けた実際の行動を起こしていないことが明らかになった。また、日本の学生の場合、特に将来の社会的地位や経済力と言った観点からは、中国の場合ほど圧倒的なメリットを留学に対して期待しているわけではない様子が伺えると述べられている(河合、韓、孔　2011)。

一方で、松田美佐の「若者の海外志向を規定するのは何か―大学生調査の分析より―」では、若年層で男性より女性の方が海外渡航者数が多いことを踏まえて、性別により比較をしたところ海外経験などには差がみられるが、これからの渡航希望や意欲には差が見られなかったと述べられている。また、近いうちに留学や渡航を希望する学生の特徴に関して、海外経験や外国に対する関心が渡航希望に繋がっている一方で、外国人とのコミュニケーション能力に対する劣等感が渡航を希望しないことに繋がっていると述べられている(松田　2016)。

しかし、執筆されたのは１２年前の２０１１年であるため、２０２０年の新型コロナウイルス流行や円安、物価の上昇などといった近年における社会情勢も踏まえて再度研究する必要性があると考える。

そして、岩城奈巳、巽洋子の「COVID-19 による学生の留学に対する意識変化－大学生への調査を通して―」では、コロナ禍における留学に対する意識の変化、オンライン授業の是非、国内で実施可能な類似体験の３つに焦点を当てて調査を実施し、新型コロナウイルスが留学を希望する学生に大きな影響を与えていることが明らかになっている。また、影響を受けたものの多くの学生は留学に対して積極的な姿勢を示しており、パンデミック終了後を見据えて留学を考えていることが判明した。しかし一方で、一定の割合で卒業や大学院進学との兼ね合い、就職活動を遅らせることができないため諦める学生も存在していると述べられている(岩城、巽　2021)。

文部科学省は「若者の海外留学を取り巻く現状」について日本の経済再生や活力維持のため、経済活動や研究開発を様々な側面から支える人材を強化するため、世界で戦えるグローバル人材の育成が必要であると述べている。さらに、２００４年以降海外留学

をする日本人学生数は減少しており、その要因として就職活動、経済、大学の体制に関することが挙げられると述べられている（文部科学省　2014)。

このように、「国際志向性」、「内向き化」、「留学の現状」等のように大学生の留学に関する個々の文献はたくさん存在する。しかし、少しずつ共通点はあるものの、「日本人留学生はなぜ女性の方が多いのかに関する研究」は今までにない。そのため、本研究では男女の留学や海外志向に対する考えの違いとそれが留学にどのように結びついているのかを、インタビューをしながら明らかにしていきたい。

## 1.3　研究テーマ

本研究のテーマは「日本人留学生はなぜ女性の方が多いのか」である。大学生と大学在学中に留学をした卒業生を対象に研究を行い、彼らはどのようなプロセスを経て留学を決意するのか、きっかけや決定打となる要因などを明らかにしていきたい。さらにそれらに加え、プロセスを構築する中での男女間における考え方の違いも明らかにしていく。

## 1.4　研究方法

本研究では文献研究とインタビューを用いる。対象 1 として「期間や地域を問わず留学を経験した大学生」を対象とし、留学を考え始めた時期やきっかけ、留学を経験するまでのプロセス、現地の学校の日本人比率、留学前と後で国際性に変化は生まれたかなどを明らかにしていく。さらに、対象 2 として「明星大学人文学部国際コミュニケーション学科で現在または今までに留学 1 の授業を履修したことのある学生」を対象とし、留学 1 の授業を履修した動機や留学予定やあるかを明らかにしていく。そして、対象 3 として「明星大学人文学部国際コミュニケーション学科で体験系科目を履修した学生」を対象とし、体験系科目を履修した動機や、対象 1 と同様に履修前と後で国際性に変化は生まれたかなどを明らかにしていく。インタビューの方法としては、半構造化インタビューを用いる。

## ２．本論

### 2.1　調査の対象と方法

本研究では半構造化インタビューを用いて調査を行う。半構造化インタビューとは、構造化された質問と緩やかに構造化された質問とをミックスしたインタビューである（質的調査法入門 2004)。インタビューでは、対象を「期間や地域を問わず留学を経験した人」と「明星大学人文学部国際コミュニケーション学科で現在または過去に留学１もしくは海外フィールドワークの授業を履修している（したことのある）学生」と「明星大学人文学部国際コミュニケーション学科の男子学生」の３つに分類する。まず、対象１「期間や地域を問わず留学を経験した人」では、在学生の男女３人ずつと大学在学時に留学を経験した卒業生の男女１人ずつの計８人にインタビューを行った。対象１への共通の質問は５問であり、「国際系・語学系の学科に進学した理由」、「留学した理由やきっかけ」、「留学に興味を持ち始めた時期」、「留学した時期となぜその時期にしたのか」、「留学先で在籍していたクラスの日本人の男女比率」である。これらの質問から、留学に対する意識や考え方に男女間で何かしらの違いはあるのかを明らかにする。次に、対象２「明星大学人文学部国際コミュニケーション学科で現在または過去に留学１もしくは海外フィールドワークの授業を履修している（したことのある）学生」では、留学１を履修したことのある男女２人ずつと海外フィールドワークを履修したことのある男女２人ずつの計８人にインタビューを行った。対象２への共通の質問は３問であり、「国際系・語学系の学科に進学した理由」、「留学１または海外フィールドワークを履修した理由」、「授業を履修する前と後での留学意欲に違いはあるか」である。これらの質問から、学科内の授業と留学意思の関連性を明らかにする。最後に、対象３「明星大学人文学部国際コミュニケーション学科の男子学生」では、在学生１０人にインタビューを行った。対象３への共通の質問は２問であり、「国際系・語学系の学科に進学した理由」、「留学に興味あるか」である。質問が２問しかない理由は留学に興味あるかないかの回答でその後の質問が大きく異なってくるためである。留学に興味あると回答した場合は「留学に興味あるものの、留学しないまたは断念した理由」を質問し、留学に興味ないと回答した場合は留学に興味ないものの国際･語学を学んでいる理由や留学に興味ない理由を質問した。これらの質問から男性ならではの海外や留学に対する考え方を明らかにする。

2.2　インタビュー

（1）対象者１へのインタビュー結果

まず、「国際系・語学系の学科に進学した理由」に関して、対象者全員に大学入学以前から留学の意思があることが明らかになった。「大学の留学制度を利用して休学をせずに４年間で卒業かつ留学をしたい」という理由と、「大学で英語を幅広く学びつつ留学もしたかったから」という２つの理由が挙がった。

また、「留学した理由やきっかけ」では幼少期の経験がきっかけであることや将来を見据えてという理由など様々な回答が挙がった（表１）。その中でも多かったのは「日本で学ぶよりも着実に語学力が向上しそうだから」と「生活環境が変わることで新しい発見がありそうだから」であり、前者は、ネイティブスピーカーと話すことで発音やアクセントなどの細かな部分も習得できると考えたためと述べていた。後者は、日本とは全く異なる文化や生活スタイルを経験する中で自分の好きなことややりたいことなどの新しい発見をしたいと述べていた。また、「海外で働きたいから」と述べた女性は、「日本は男女平等とは言い難く、女性は男性と比べて働きにくい環境にあるため海外で働くことを視野に入れている」という理由を挙げた。

| **表１ 留学した理由やきっかけ　回答内容** |
|---|
| 英語が話せたら視野が広がると思うから　（男性） |
| 海外で働きたいから　（女性） |
| 幼少期からドラマや洋画を観ていて海外生活に憧れを抱いたから　（女性） |
| 外国人の友達を作って価値観や視野を広げたいから　（男性） |
| 日本で学ぶよりも着実に語学力が向上しそうだから　（男性、女性） |
| 生活環境が変わることで新しい発見がありそうだから　（男性、女性） |

さらに、留学する目的は語学学習以外にあるかを尋ねたところ、８人中３人が学校やその国ならではのイベントに参加すること（男性１人、女性２人）、２人が世界遺産や観光スポットに行くこと（共に女性）、１人がホームステイで異文化を体験すること（男性）、１人が様々な国の友達を作ること（男性）、１人が異国の地でも生きていく力を身に着けること（男性）であった（図１）。

図１　語学以外の留学目的

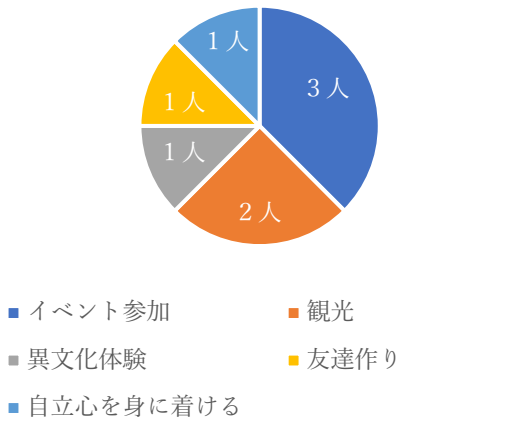



図２ 留学に興味を持ち始めた時期

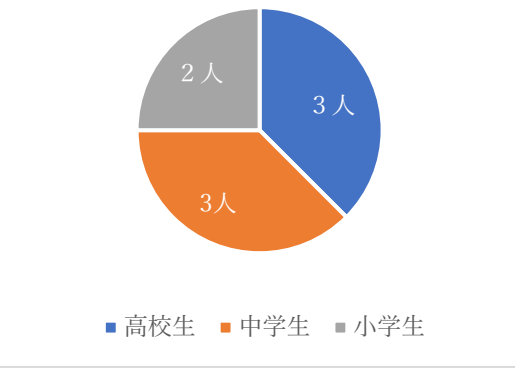
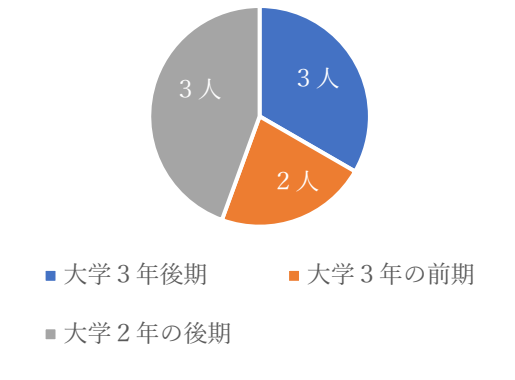
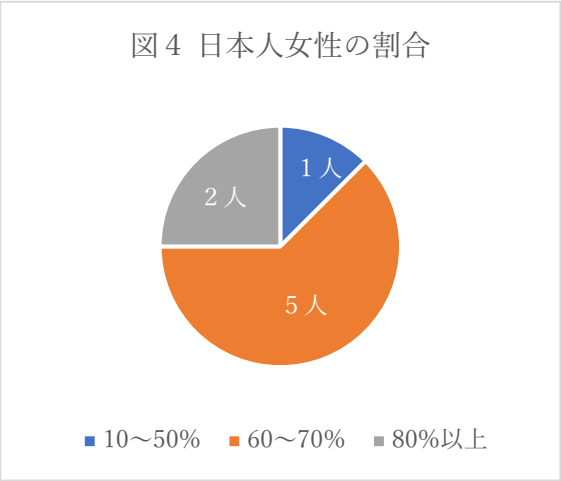



図３　留学した時期



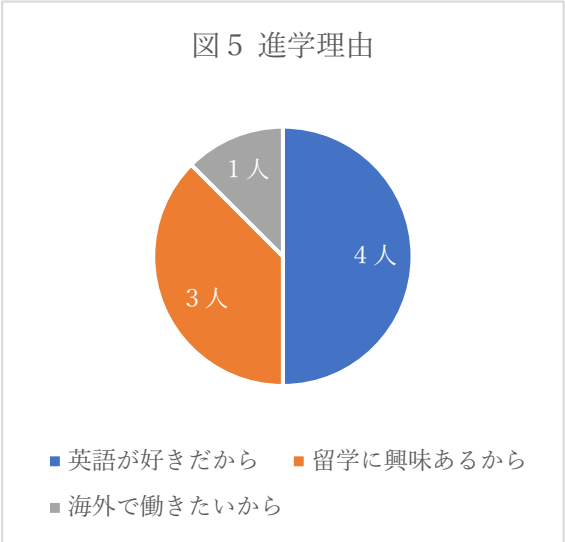

「留学に興味を持ち始めた時期」では、８人中３人が高校生、３人が中学生、２人が小学生の頃であった(図２)。男女の内訳は高校生と回答した３人全員が男性、中学生と回答した３人のうち１人が男性、２人が女性、小学生と回答した３人全員が女性である。

「留学した時期となぜその時期にしたのか」は、８人中５人が大学３年生の後期、３人が大学２年生の後期であった(図３)。対象者である８人のうち在学生である６人はコロナ禍での大学入学であったため、世界情勢や安全面を考慮し時期を自由に選択できる環境下にいなかった。しかし、６人全員が「留学時期が遅ければ遅いほど、就職活動やその後の進路に影響が出そう」や「早いうちに留学することでその後の選択肢も増えると思った」などの理由から可能な限り早い時期の留学を望んでいた。さらに、コロナ禍以前に入学をしているその他の２人も同様に「余裕を持って就職活動に取り組みたかったためできるだけ早く留学したかった」と「とにかく留学したい気持ちが強かったため、選択できる１番早い時期を選んだ」という理由から早い時期の留学を望んでいた。




「留学先で在籍していたクラスの日本人の男女比率」では、８人中７人が日本人学生は男性より女性の方が多かったという結果になった（図４）。最も多かったのは６０％から７０％の間であった。留学先は北米や欧州など様々だが、地域や国に関係なく日本人は女性の方が多かったという結果になった。また、７人に日本以外の国籍の留学者の男女比率も尋ねたところ、韓国や台湾・ベトナム・タイなどの国の留学者も女性の方が多かったという。しかし、７人全員が最も男女比率に差があったのは日本だったと回答した。さらに、サウジアラビアやアラブ首長国連邦などの中東からの留学生は男性の方が多かった全員が回答した。

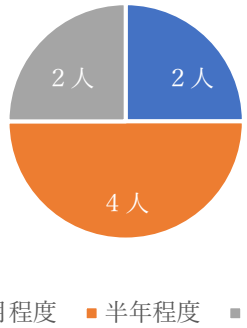
（２）対象者２へのインタビュー結果




「国際系・語学系の学科に進学した理由」では、８人中４人が「英語が好きだから」（男性２人、女性２人）であり、３人が「留学に興味があるから」（男性２人、女性１人）、１人が「卒業後は海外で働きたいから」（女性）であった（図５）。卒業後に海外で働くことを望んでいる対象者に理由を尋ねたところ、「日本は女性より男性の方が働きやすい環境にあると思うから、卒業後に海外で働くことを視野に入れている」という。そのため、学生のうちに留学をして、その後海外で就職をするというライフプランを立てているという。

図６ 履修した理由
（留学１・海外FW）

図７ 希望する留学期間




「留学１または海外フィールドワークを履修した理由」は８人中４人が留学に興味あったためであり、この４人は全員留学１履修者である（図６）。また、海外フィールドワーク履修者は４人中２人が「海外へ行ったことがなく留学でいきなり海外へ行くのは不安であるため、まずは授業を通して異文化体験をしたい」という理由であった（共に女性）。その他の２人は「外国人と関われるいい機会だから」と「単位取得のため」であった（共に男性）。「授業を履修する前と後での留学意欲に違いはあるか」では、留学１履修者は留学意欲が強くなったという人と弱くなったという人で半々という結果になった。留学意欲が強くなったと回答した人は、授業を通して留学の具体的なイメージが掴めたことや自分のやりたいことや目標が明確になったということを挙げられた。一方で弱まったと回答した人は、一人で渡航することに対しての不安が払拭できなかったことや留学における費用が明確になったことで金銭面を理由に実現させることが厳しいと判断したようである。

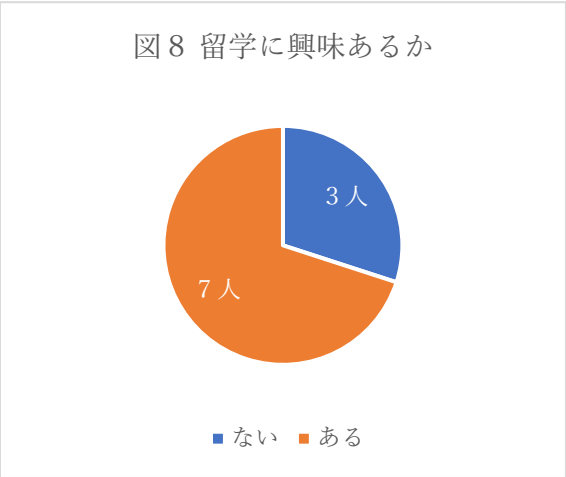
さらに、対象２に「もし留学をするならどのくらいの期間を希望するか」を尋ねたところ、男性と女性で意見が分かれた（図７）。男女の内訳は１か月程度と答えた２人が男性、半年程度と答えた４人が男女２人ずつ、１年程度と答えた２人が女性である。

（３）対象者３へのインタビュー結果

「国際系・語学系の学科に進学した理由」の回答は大きくばらつきがあった（表２）。最も多かったのは「留学に興味あるから」であった。また、英語が好きだからこそ進学したという人もいれば、英語は苦手だけど話せたらかっこいいと思うから勉強するため

に進学したという人、両親に勧められたからという人もいる。

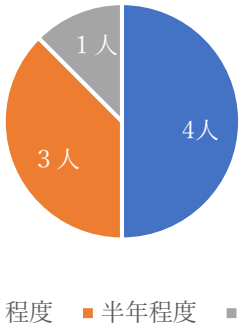
| 表２国際系・語学系の学科に進学した理由　回答内容 |
|---|
| 留学に興味あるから（３人） |
| 英語が好きまたは興味あるから　（２人） |
| 英語が苦手だけど勉強して話せるようになりたいから　（２人） |
| 高校生の頃、英語が１番得意な科目だったから　（１人） |
| 英語が話せたら将来役立ちそうだから　（１人） |
| 両親に勧められたから　（１人） |




「留学に興味あるか」では、１０人中７人が興味あるという結果となった（図８）。「留学に興味ある」と答えた人に、「留学に興味あるもののしない理由」を尋ねたところ、費用を理由とする人が最も多いという結果になった（図９）。また、７人のうち２人は部活動に所属しているため在学中の留学は不可能であるという。しかし、２人とも卒業後にワーキングホリデーをしながら海外で語学を学ぶ予定である。彼らに大学を卒業してからでもワーキングホリデーをしたい理由を尋ねると、「海外での生活を通して気付く自分の本当にやりたいことや強みなどがあると思うから」と「留学したいという気持ちは入学当初から今も変わらず強くあるため、就職時期が遅くなってでも海外に行きたい」と述べていた。また、将来は英語を使う機会が少なそうと回答した人は、「日本で就職すると必然と英語を話す機会は少なくなるため、留学をしてまで語学力を身に着けたいとは思わない」という理由を挙げていた。メリットが少ないと回答した人は、「留学したからといって

図９ 留学に興味あるもののしなかった理由

図１０ 希望する留学期間




必ずしも英語が流暢に話せるようになるとは限らないし、多額の費用がかかることも考えると負担がかなり大きい」と述べていた。一方で、留学に興味ないという３人からは「大学で勉強をしていても工夫次第で英語は話せるようになる」や「留学先で学ぶ内容は日本でも学ぶことが出来るのではないかと思うから」という意見が挙がった。

さらに、今回インタビューした男子学生の中に大学の留学制度を利用せず、長期休暇を利用して個人的に留学をした学生が１人いた。彼に大学の留学制度を利用しなかった理由や目的等を尋ねたところ、昔から留学に興味はあったものの長期での留学は希望しておらず、最長でも１か月程度の短期留学を希望していたという。彼の周りには留学経験者が複数いるが、思った以上に話せるようにはならないという感想を多く耳にしたからである。そこでまずは海外生活を経験することや異文化を体験することを目的として１か月の短期留学を決意したそうだ。

また、その他の留学に興味ある男子学生にも、もし留学をするならどのくらいの期間を希望するか聞いたところ半数以上が１か月程度の短期間であった(図１０)。「現地滞在中はアルバイトをすることも難しいため、長期滞在は金銭面の不安が大きい」や「期間が短くても異文化を経験したり異国の地で生活したりしたという経験から学ぶことはたくさんあると思うので十分満足できそう」といった意見が挙がった。

2.3　インタビュー結果からみる傾向

（1）インタビュー１の分析

対象者１へのインタビューを通して、留学に興味を抱き始める時期に男女それぞれ傾向があることが指摘できる。女性は小学校や中学生など比較的早い時期、男性は中学生や高校生になってからといった女性と比較すると比較的遅い時期である。

また、語学学習以外の留学目的に関して、女性は観光やイベントを重要視している人が多い傾向にあり、男性は異文化体験や友達作りを重要視している人が多い傾向にあることが指摘できる。

（2）インタビュー２の分析

対象者２へのインタビューを通して、留学１や海外フィールドワークを履修する理由に関して女性は留学するための準備段階として捉えている人が多く、男性は授業の一環として捉えている人が多い傾向にあることが指摘できる。

（3）インタビュー３の分析

対象者３へのインタビューを通して、男性は女性と比較すると短期での留学を希望する人が多い傾向があることが指摘できる。インタビュー２と３で質問した「もし留学するならどのくらいの期間を希望するか」では、共に男女で顕著な差が生じた。女性は中期から長期の留学も希望する人が多い一方で、男性は短期に集中していることが明らかになった。

2.4 インタビュー結果と２つの関連

（1）歴史的に見た日本人留学生

序論でも述べたように、現代の日本は留学者数に男女間圧倒的な差があり女性の方が留学者は多い傾向にある。しかし、明治時代にまで遡ってみると文部省在外研究員（留学者）は男性ばかりであり、女性が１人も留学していないという年がほとんどである。大正時代になると１，２人程度の女性留学者が出始めるものの多い年でも３人とその差は歴然としている。

また、「１９００年頃から１９１８年頃までの時期は、帝国大学の新設を中心に、高

等教育機関の拡充をしていく時期であった。文部省留学生制度開始当初は東京（帝国）大学の教員養成を主たる目的でされており、留学者の選抜も文部省が行っていた。」という。（辻 2008）さらに、「幕末期では、幕府・諸藩などの多元的集団による海外留学の派遣が主流をなし、その多元性は明治に入っても見られるが、それは国家なる高次の集団に一元的に集中され、留学生かは国家に吸収されることになる。」（石附 1973）とあるように幕末や明治の時代は語学学習を主たる目的としている現代とは留学の意義が異なることが現代と昔で留学者の男女比率に変化が見られる要因のひとつと指摘できるのではないか。

（２）ジェンダー・ギャップ指数

世界経済フォーラムが毎年発表している、政治・経済・教育・健康の４つの分野における男女間の格差の状態や度合いを示す指数のことである。２０２３年の発表では、日本は１２５位であり、Ｇ７の中では最下位である。４つの分野の中でもとりわけ深刻といえるのが政治であり、国会議員（衆院議員）の男女比、閣僚の男女比、過去５０年間の行政府の長の在任期間の男女比は極めて低い。

一方１位はアイスランドであり、１４年連続で１位となっている。アイスランドが男女平等を実現するために取り組んでいることとしては議会の場などで男女比率に偏りが起きないようにするためのクオータ制の導入や男女の賃金格差を発生させない同一賃金認証法の施行、男女共同育児休暇制度の導入などが挙げられる。

Statista が発表した２０００年から２０２０年の男女別アイスランド人留学者数によると２００６年から２０２０年までのアイスランド人留学者は女性の方が多い。一方で２０００年から２００５年は男性の方が多い。しかし、１番差がある年でも１００人程度の違いと男女比は大差ない。

「日本の労働市場では、パートタイム労働者の比率が高い一方で、正社員での短時間勤務などの柔軟な働き方は限られている。このため、フルタイム（しばしば残業付き）で就業できない場合、正社員に比べて待遇の劣る非正規雇用という選択肢しかないことが多い。」（権丈 2022:13）

とあるように、出産や育児といった女性のライフイベントによるその後の働き方に対して日本は柔軟ではないことから、労働環境による男女格差は少なからずあることが言えるとともに、アイスランドがそうであるように男女平等であればあるほど留学者の男

女比率の差も少ないことが言える。そのため、ジェンダー・ギャップ指数と留学者数の男女比率も関連している要素のひとつであると考える。

## ３．結論　日本人と海外留学の今後

### 3.1　本論文の概要

日本人留学生は男性より女性のほうが多いというデータを知ったときに私自身の留学経験と重ね、私が在籍していたクラスでも日本人は女性の方が圧倒的に多かったことから留学生の男女比率に興味を持った。先行研究では、昔から現代における留学の変容や大学生を対象に調査が行われている論文が多数存在するものの、男女比率に着目しているものはなかったためこの研究を始めた。インタビューを行う前までは、男性留学者の方が少ないのは就職活動に影響したくない人がほとんどであるからだと考えていた。しかし、対象を３つに分類しそれぞれにインタビューを行う中で男女間における留学に関する考え方や意識にそれぞれ傾向があることが明らかとなった。それは留学に興味を持ち始める時期や理想とする留学期間、留学をする目的等である。語学や留学に興味を持つきっかけは周囲の影響、育ってきた環境など様々であっても、女性の方が男性と比較して比較的早い時期である人が多いというデータを得ることができた。また、女性は長期での留学を希望する人が多い傾向にあるが、一方で男性は長期を希望する人はいるものの短期での留学を希望する人の方が多い傾向にあることがわかった。その理由として、金銭面の考慮や短期留学の手軽さが挙げられた。さらに、留学の目的として男女ともに語学学習を主な目的としているものの、女性は海外生活を経験したい人や現地でのイベントやアクティビティなども重要視している人が多い傾向にあり、男性は異文化体験や外国人の友人作りを重要視する人が多い傾向にあることがわかった。

### 3.2　日本人大学生の留学のイメージと現実

本研究では、日本人留学生の男女比率に着目し、なぜ女性の方が留学者は多いのか明らかにされていないため半構造化インタビューを用いた調査を行った。この調査から、男女間での留学に対する意識や考え方の違いや学科内の授業と留学意思の関連性、男性ならではの海外や留学に対する考え方などが明らかとなった。

### 3.3　課題と展望

今後の課題としては、今回この研究をするうえで私自身が大学在学中に留学をしたという理由で大学生と大学在学中に留学した卒業生のみに焦点を当ててインタビューを進めてきたが、日本人留学生は女性の方が多いというデータは大学生のみに限定したものではないため、高校生や社会人など年齢層を広げて研究を行うことでより多くの意見の中から考察していきたい。

### 3.4　研究を終えて

本研究を進めるうえで様々な論文を読み、日本人留学生の課題や現状、日本における外国人留学生の受入との関係性なども知ることが出来た。また、留学経験者だけでなく留学 1 や海外フィールドワークの履修者にも着目する中で、留学したいものの金銭面や語学力、現地での生活などが理由で不安が大きいことやハードルが高いとの意見を多数耳にしたと同時に、自分が思っている以上に留学に興味ある人はたくさんいるということも知ることが出来た。現在大学 4 年生の在学生は、コロナ禍の入学ということもあり自身を含め本来希望していた時期に留学できなかった人、在学中の留学を諦めた人、そもそも留学すること自体を諦めた人などが大勢いることも強く実感した。社会情勢を鑑みるとしょうがないと言わざるを得ないものの、留学をするために大学進学を選んだ人もいるため、日本にいながら海外の大学の授業に参加することが出来るオンライン留学の拡充も今後さらに需要が高まるのではないかと感じた。また、金銭面を理由に断念する人が多いことに対し、比較的安価で行くことのできるフィリピンやマレーシアといったアジア圏を留学先とした大学の留学制度の充実も需要が高まるのではないか。

さらに、今回インタビューを行う中で「日本は女性が働きにくい環境である」という意見も複数耳にした。私が留学中に出会ったワーキングホリデーでオーストラリアに来ていた日本人女性も、「日本より海外の方が男女平等で働きやすいから海外に来た」と言っていたことを思い出した。アイスランドのようにジェンダー・ギャップ指数を上げるための政策をすることは男女平等のための大きな一歩でもあると強く感じた。男女ともにポジティブな理由で留学やワーキングホリデーなどに挑戦する人が増えることを望んでいる。

参考文献

石附実
1973 年「近代日本海外留学史の研究(Abstract_要旨)」pp.39-42，京都大学学術リポジトリ紅。
岩城奈巳、巽洋子
2021 年「COVID-19 による学生の留学に対する意識変化-大学生への調査を通して-」『名古屋大学高等研究』第 21 号，pp.187-206，名古屋大学高等教育研究センター。
大川彰一
「内向き志向の日本人は古い考えだ」(2023 年 5 月 2 日アクセス) 東洋経済オンライン
「内向き志向の日本人」はすでに古い考え方だ 最新の留学生数から見える日本の将来像とは ｜ リーダーシップ・教養・資格・スキル ｜ 東洋経済オンライン（toyokeizai.net）
太田知彩
2021 年「現代日本における「留学」の変容過程」『教育学研究 88』，pp.235-246。
太田浩
2011 年「なぜ海外留学離れは起こっているのか」『教育と医学 59』，pp.68-76，慶応義塾大学出版会。
太田浩
2018 年「日本人学生の内向き志向に関する一考察　-既存のデータによる国際志向性再考-」『ウェブマガジン留学交流 7 月号』pp.1-19，独立行政法人日本学生支援機構。
河合淳子、韓立友、孔寒冰
2011 年「大学生の留学志向と社会的背景-日中比較を手がかりとして-」『京都大学国際交流センター論考』pp.1-20，京都大学国際交流センター。
権丈英子
2022 年「ジェンダー・ギャップ指数から見る日本の課題と展望」『資本市場/資本市場研究会編(448)』pp.16-26，資本市場研究会。
工藤正司(アジア学生文化協会常務理事)
2001 年「歴史的に見た留学の変容と「今日の留学」『SAGA レポート』pp.1-21，関口グローバル研究会。
佐々木啓子

2020 年「戦前期女子留学者の渡航目的および派遣機関の動向について-高等教育機関と専門職位の獲得を求めて-」『電気通信大学紀要 32(1)』pp.10-22，電気通信大学。
北野知佳
2020 年「ジェンダー化される留学とキャリア」『ジェンダー研究：お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報(23)』pp.185-206，お茶の水女子ジェンダー研究所。
公門優希
2016 年「明治日本における女子留学事業の展開 - 津田梅子の活動を中心に-」『政治学研究 55 号』pp.89-114，玉井研究会。
黒宮亜希子、橋本由紀子、金沢真弓
2016 年「海外留学に臨む大学生の実態と課題について-学生を対象とした調査を基に-」『吉備国際大学研究紀要(人文・社会科学系)(26)』pp.121-133。
小島奈々恵、内野悌司、磯部典子、高田純、二本松美里、岡本百合、三宅典恵、神人蘭、矢式寿子、吉原正治
2014 年「日本人大学生の海外留学に関する意識調査-「内向き志向」と留学意思の関係-」『総合保健科学 30』pp.21-26，広島大学保健管理センター。
辻直人
「二十世紀初頭における文部省留学生の派遣実態とその変化についての一考察」
独立行政法人日本学生支援機構『日本人学生留学状況調査』（2023 年 6 月 19 日アクセス）
URL:日本人学生留学状況調査 ｜JASSO
松田美佐
2016 年「若者の海外志向を規定するのは何か-大学生調査の分析より-」『紀要社会学・社会情報学』第 26 号，pp.11-41，中央大学学術リポジトリ。
文部科学省「若者の海外留学を取り巻く現状について」（2023 年 5 月 11 日アクセス）
URL:sankou2.pdf (cas.go.jp)
横田雅弘、小林明
2013 年『大学の国際化と日本人学生の国際志向性』学文社出版。
“Number of Icelanders studying abroad from 2000 to 2020, by gender”（2023 年 10 月 23 日アクセス）
URL:Iceland: students abroad 2020 by gender | Statista